

合理性に対する合理的批判

アンドリュー・フィーンバーグ(サイモンフレイザー大学)

近代社会は、前近代社会から区別されるように見える、という非常に特殊な意味において合理的であると言われている。もちろん、近代社会が数学や物理学と同じように合理的だということではない。しかし、近代性の構造に備わっている何かが、これらの学問分野のうちにわれわれが見出すような合理性に類似している、というのである。問題は、それが何であるのか、ということだ。

ある種の自己満足的な回答は次のように主張する。すなわち、われわれは祖先たちよりも合理的である。というのも、われわれは自然について科学的な知識に到達しているが、彼らはそれについて神話しかもっていなかったからである、と。ここにはいくらかの真理があるとはいえ、それほど重要なものではない。最も先進的な諸国においてさえいまだに広く受け容れられている数々の奇怪な信念のことを考えてみれば、事態がほとんど変わっていないことが明らかとなるであろう。例えば、アメリカ人の大多数は天使がいるのだと信じているが、彼らにとってこのことは、われわれが合理的だと考えるような近代の効率的な仕方それぞれの職分を果たすことを妨げるものではない。そればかりか、人々は近代科学が発達するよりもはるかに以前から、さまざまな新たな発見を行うことができたのであり、またそれによってテクノロジーを改良することができたのである。とはいえ、前近代における技術的な進歩には、ある種の非科学的な合理性が含まれている。結局のところ、合理性は必然的によいものだというわけではないし、また成功を保証するものでさえない、という点に留意しなければならないのだ。この概念は、社会のなかで具体的に用いられる場合には、実践のあるタイプを描き出すことになるわけだが、目的そのものをもたらすものではないし、ましてや道具的な効力を保証するわけでもない。ヒトラーのドイツは、それがもたらした罪悪と災厄という双方の帰結において、高度に組織化された合理性を示していた。

先の問いに対する別のより興味深い回答は次のように指摘する。すなわち、近代の社会システムと社会組織は、科学的な専門分野で実践されている合理性についてわれわれが抱いている観念に、何らかの仕方で類似した諸原理に従っているのだ、と。その主要な三つの実践は次の通りである。

- 一 等価交換
- 二 分類化と規則の適用
- 三 労力の最適化と結果の計算

これらの原理はそれぞれ「科学的」であるように見える。計算とは等価物の交換である。つまり、等号の両側は正確に等価である。あらゆる科学的作業は、対象を分類し、ある種の規則に従ってそれらを一律に取り扱うことで進行する。そして科学はその対象をそれまでよりも一層慎重に測定するのである。われわれの時代の社会生活はこれらの科学的手続きを反映するようになっている。この構造を「社会的合理性」と名づけよう。それは、合理的実践のしかじかのタイプによって特徴づけられるある種の制度的な秩序のことである。

人間のいるところであればどこでも、多かれ少なかれ合理的な個人の行動と、道具的な効果をもたらす集団的な行動が観察される。社会的合理性を特殊なものにしているのは、市場のような制御媒体 (coordination media) の役割 (第一の原理) と、形式的な組織化、そしてテクノロジーである (第二・第三の原理)。先に挙げた合理性の三原理はいずれも、あらゆる社会において作働しているわけだが、ただ近代社会においてのみ、それらが市場、組織およびテクノロジーを通じて大規模に実行されている

のである。社会的合理性を特徴づけているのはこの点である。それが近代社会と前近代社会のあいだにもたらす相違点について、より詳しく考察してみよう。

——前近代社会において生産者は、一般に、彼らが生産した財・商品を物々交換していたわけだが、市場が存在するところでの彼らの立場はかなり周縁的なものにとどまっていた。封建社会のもとでは、商品流通の多くの場面で、取引交換よりは課税が利益の源泉となっていた。これらとは対照的に、近代の経済は、商品や労働から対価を得るために、貨幣を交換するという活動を中心に組織化されている。

——伝統的な社会は人々を各階層に分類し、さまざまな規則・決まりごとを彼らに課しているが、その分類様式と規則は文化的伝統のなかで受け継がれている。近代社会において、自治体や各種政府機関のような組織は、組織内部の階層的な分類様式を自ら構築し、自らに規則を適用する。このことは近代の組織に非常に柔軟な性格をもたらしている。つまりそのシステムは、文化が変化するようにゆっくり進化していくというよりは、むしろ一夜にして変わりうるものなのである。それは意識的にデザインされており、過去から相続されたものではない。

——どんな社会でも、ある人々は自分たちの活動とその技巧をより効率的なものにしようと試みており、それによって得られる成果の見当を正確につける (measure) べく試みている。だが、われわれの社会においてのみ、こうした試みが組織において最優先される作業となっているのであり、またわれわれの社会においてのみ効率と測定手段 (measurement) の恒常的な進歩が認められるのである。

要約すると、社会的に合理化された社会 (a socially rational society) は、合理性の三つの原理の周囲で、市場・組織・テクノロジーによって構造化されている。それによってこの社会は、等価交換よりはむしろ支配と従属からなるシステムによる規整の方と好対照をなしているのであり、また形式的な分類法や規則よりは非形式的なもの、そして注意深く計算された最適化戦略とその技術^{テクノロジー}よりは伝統的な測定方法と、それぞれ好対照をなしているのである。

ハーバースが指摘するように、近代の合理性は技術的な次元と規範的な次元の双方を備えている。このことは市場という事例においてとりわけ明らかである。等価交換の原理に従えば、市場は数学的かつ道徳的な双方の意味における平等を尊重していることになる。数値のうえで平衡のとれた交換は公正なものでもあるのだ。そのうえさらに、科学的合理性はあるユニークな特性をもっている。つまり、暴力や贈賄といった手段によるのではなく、議論を介して合意を打ち立てる、という特性である。科学者たちは、より強力な議論が科学者共同体の大部分を説得するがゆえに同意するのであって、ある者たちがより多くの銃や金銭を他の人々よりも持っているがゆえに同意するのではない。合理化された制度もまた、科学者たちが理論を正当化するために提示するものほど強制的な性格をもっているわけではないが、諸々の理由というものを引き合いに出すことによって、それ自身の構造と諸般の意思決定とを擁護することができるのである。

西洋の社会思想家たちは長きにわたって次のように信じてきた。すなわち、合理化された社会は、合意形成の形式だけでなくその力学において、科学に類似した平和な社会になりうるのだ、と。けれども、社会生活において利害関心の対立をもたらす要素を排除しようということが、それほど単純に証明されたわけではない。現実には、合理性そのものが批判的な攻撃の対象となっているのである。

合理性に対する社会批判は、合理性の諸原理が人間に対してシステムティックに適用され始めた十八世紀末に生じた。その頃、人口という単位が、組織によって効率的に活用される資源という姿を次第に取り始めていた。市場は、より個人的な形式を取る占有と交換に対して優位に立った。伝統的な価値体系や制度のなかにつねに位置づけられていたテクノロジーは、その文脈から次第に乖離していき、独

立した力として現れ始めた。

人間が経済的・技術的な見地から考慮される場合、その観点に回収されない他の潜在能力とニーズは無視されてしまう。かくして、社会的なもの和个人的なものが対立し始める。あるいはむしろ、社会的なものの機能化という現象が、あらゆる機能に対立する新しい意味での個人というものを作り出すのである。機能化は、世界へと合理的に赴く態度に対するロマン主義的な批判を引き起こす。それは、バルザックの小説の登場人物ヴォートランが述べた「私は生という対抗者の側にいるのだ」という誇り高い主張に体现されている通りである。「生」対「機械」というこのイメージは、テクノロジーだけでなく市場と官僚制との関わりをも踏まえた社会的合理性に対する批判のなかで恒常的に再現されるものである。けれども、資本主義、つまり合理的組織を一般化するこの経済システムが、極めて抑圧的で不公正なシステムであるという事実が暴露されたにもかかわらず、ロマン主義は近代がもたらしてきたさまざまな利益を放棄するように多くの人々を説得させることには決して成功しなかった。

社会的合理性に対するもうひとつの批判はマルクスに由来する。マルクスは、等価交換が諸々の偏向した効果を引き起こしていることについて理解した最初の人物であった。彼と同時代の社会主義者たちの多くが、「所有とは盗みである」というブルードンの説に賛同しており、したがって現実に行われている等価物の交換は盗みではないと考えていたのに対し、マルクスは事態を道徳化しようとするその種の不満を斥け、市場における労働そのものを分析したのである。彼の最初期の想定は、同時代の経済理論から引き出された等価交換の原理にもとづいていた。その理論によれば、財はその労働内容によって評価され、大部分はその等価物と交換される、ということであった。マルクスが直面した問題は、この等価交換の原理にもとづきながらも、地位・能力に見合った取り分 (merit) という疑わしい観念や、社会契約のような原初の神話に訴えることなしに、資本主義社会の不平等をどのように説明するか、ということであった。

マルクスがこの問題をいかに解決したのかについてはよく知られている。彼は次のように論じたのであった。すなわち、等価交換の原理によれば、労働の価値は、ちょうど他の任意の商品と同じように、それ自身の再生産に要する費用によって計られねばならない。けれども労働の生産力は、一労働日にとわって、その費用と等価の財を生産するのに必要な時間よりも長く利用されていた。こうして差異すなわち剰余価値が資本家に発生したのであり、社会主義者たちが前提したような盗みや詐取を欠いているにもかかわらず、目に見えて明らかな不平等が生み出されたのだ、というわけである。

今日から見た場合にこの議論の興味深い点は、疑問の余地を残しているその内容よりは、むしろ形式の方に、つまり社会組織において機能する合理的な諸原理は偏向した結果をもたらすのだ、とするその論証の方にある。マルクスは、資本家が等価交換の規則に従って経営を行っており、そのようにして資本主義システムの整合性を、少なくともそのある歴史的な諸限界内において支えているのだ、ということを示した。しかし彼はさらに、資本主義システムの公正さに関する規範的な主張を脱神秘化する作業へと進んだ。彼は資本主義社会の合理性を、それがもたらす偏向した作用をも暴露しつつ明確に理解したのであり、かくして技術的なものを合理性の規範的な次元から分離したのである。

市場やテクノロジーのような近代の諸制度を特徴づける合理性に対する批判を展開することが、なぜそのように困難であったのだろうか。資本主義がもたらす偏向に対するわれわれの直観的な理解は、支配と従属という関係にもとづく伝統的な社会秩序に対する啓蒙の闘争によって形づくられている。伝統的な社会秩序に対するこの批判は、私が自体的 (実質的) な偏向 (substantive bias) と呼ぶものの存在に気づいていた。それは、社会的で心理的な態度における偏向であり、知能の欠如や自己規律のあり

方、「血統」あるいは養育環境、言葉の訛りや衣服の着こなし方など、あらゆる種類の作為的で自体説的な理由を通じて、社会のある構成員を劣位の者として指定するものである。啓蒙はこれらの疑似的な理由を、下層階級の男性に不自然な仕方でも適用されたものであるとして問題化した。かくして、支配的イデオロギーにおけるこれらの誤った自体説的な主張は脱神秘化され、またその論拠にもとづいて平等への権利が強く主張されたのであった。伝統的な社会秩序に対するこのアプローチはのちに、女性や奴隷、植民地化された者たちや同性愛者たちへの差別、ひいてはあらゆる潜在的な従属者集団への差別に対する批判に取り入れられるような、ある思考の様式を設定したのである。

マルクスはこのような批判の仕方に対して懐疑的であった。というのも、それは経済的不平等という注目すべき事実に言及していなかったからである。彼は啓蒙的な批判によって無批判のままに放置される事柄の方に焦点を当てた。市場が公正であり、かつ公正な市場を特徴づける合理的な計算の構成要素が普遍的で中立的な科学的知識というわれわれの観念と混同されているために、社会的形式において機能している合理性は、それがもたらす諸々の偏向した結果に対する批判を免れてしまうのである。マルクスの方法論的な革命は、この合理性の社会的形式に対するより深くそしてより洗練された分析によって、こうした障害を回避する道を案出したことにある。資本主義システムにおける最も根本的な偏向は、種々の非合理的な先入見に起因するものではなく、等価交換という合理的な原理を具体的に実行するそのシステムの運動から生じてくるのである。

先入見によって規定されたこのタイプの社会的編成を描き出すために、私は「形式的偏向」(formal bias) という概念を導入してきた。形式的偏向は、合理化されたシステムや制度が特定の社会集団に資するような仕方でも構造化されているところであれば、どこにでも遍在している。マルクスの経済理論は、形式的偏向がどのように作働しているのかに関する第一級の事例を提供している。より近年になると、個別的な先入見に対する批判を補完するために、制度的差別という概念が発展させられてきた。マイノリティの居住区域に対する保険引き受けや担保融資を制限するレッド・ライニング (red-lining) と呼ばれる慣習的実践などは、人種やジェンダーに関する政治において形式的偏向という概念が必要であることを証示するものである。人種とジェンダーの差異にもとづいた種々の「合理的」な分類と規則は、先入見をもたない諸個人によって、全く無邪気なやり方で実行されうるのだが、しかしこれは極めて先入見に満ちた結果をとまなうものなのである。テクノロジーの批判理論は、計算や最適化という合理的な原理と社会的な決定因子とを結合させる (市場のような) テクノロジーのデザインにおける形式的偏向を分析するものである。

マルクスの批判的な方法は、『資本論』の刊行以後、テクノロジーに対して適用されることがなかった。マルクス自身の関心は、社会的合理性の第一の原理である等価交換に集中していたのである。市場は組織ではなくシステムないし制御媒体であり、その運動は適法的な形式を備えている。十九世紀の社会主義者たちを大いに魅惑した「歴史の法則」という観念は、マルクスのテクノロジー批判のうえにも明らかに影を落としている。しかしマルクス自身は、彼の方法がどのようにしてテクノロジーへと拡張されうるのかに関する重要な示唆を与えていた。マルクスはこの問題を、「相対的剰余価値の生産」という標題のもとに分析していたのである。『資本論』のこの章で彼は、資本主義システムにおける協業 (cooperation)、労働の分業、そして機械化、という三つの現象の役割について考察していた。ここでは、彼が市場に適用した方法が、それほど厳密でない仕方でもテクノロジーに適用されている。彼は、資本主義のもとで技術的な進歩が取る形式は、企業のニーズに一致するものである、と論じている。発明は、労働力をコントロールする際に資本家が出会う特定の問題に導かれているのであって、単によりよ

いテクノロジーに対する人類全体の利害関心によって導かれているわけではないのである。労働過程論がマルクスの思想のこの側面を復元し、今日の状況に適したものへと刷新したのは、一九六〇年代になってからのことにすぎない。マルクスによるこのような寄与が無視された一方で、ヴェーバーは、無批判なままに維持された資本主義的な諸前提にもとづいて組織社会学の領野を打ち立て、テクノロジーと階級の役割をめぐるマルクス的な洞察を失った。パーソンズら影響力のある後継者たちは、この理論的な欠陥と妥協的に折り合いをつけることになった。

しかしヴェーバーの理論的な寄与は、社会的合理性の問題をそのものとして主題化した最初の主要な試みという点で重要である。合理化に関する彼の理論は、近代社会における「計算とコントロール」の勃興という現象を説明している。社会的合理性に関して私が提案する理論は、このヴェーバー流のアプローチを拡張し修正を加えたものである。ヴェーバーは、合理性の第二・第三の原理、すなわち規則の適用および最適化という原理に最も関心をもっていたが、それはこれらの原理が官僚組織と経営組織とを特徴づけるものだからである。コントロールすることは、もとより成果に関してトップ・ダウン式に適用された内的基準に従いつつ行われるわけだが、それでも相当の影響力を及ぼすものであるために、組織のなかで特別に重要な役割を演じている。例えば官僚制は、被雇用者たちの仕事に報酬を与えるための諸々の規則を設定する。業績の計算は多くの場合、報酬の分配構造と、組織ならびにテクノロジーの能率を高める労力との双方に関わっている。

ヴェーバーに照らして考えると、マルクスの理論が明らかにしたものは、ルカーチの物象化理論によって最初に探究されたそれに匹敵するような、思いもよらぬ深度にまで達していることがわかる。この見地からすれば、マルクスとフランクフルト学派のあいだの意義深い連続性を認めることができる。『啓蒙の弁証法』や『一次元的人間』のような著作は、それらがマルクス主義的な合理性批判の手法を新しい対象に向けて実地に適用する際に、しばしば非合理主義的でロマン主義的であるとして斥けられた。この新しい対象、つまり遍在するテクノロジーは、第三のタイプの社会的合理性を例示するものである。その進化は計算と最適化にもとづいており、合理化された組織で行われる内的作業といくつかの相似点を有している。組織とテクノロジーはしばしば内的に込み入った仕方で織り合わされており、そのデザインと、それどころかその存在そのものにおいて、それらは互いに依存しあっている。フランクフルト学派によれば、先進産業社会はこれらの官僚制的 - 技術的システムによって「全体的に管理されている」のである。

フランクフルト学派の第一世代は、管理資本主義および国家社会主義という新たな条件のもとで、マルクス的なアプローチにおけるのとよく似た問題の追求を試みたけれども、その定式化は完全に十分なものではなかった。そこには、ロマン主義的な非合理主義であるとの非難を信頼させてしまうような種々の両義性が残り続けた。ハバーマスと彼の信奉者たちは、これらの両義性をして、テクノロジーへの批判を斥けるべき要因であると捉えてきた。テクノロジーへの問いに対する彼らの無関心と、労働者によるコントロールおよび環境のラディカルな改革に対する彼らの懐疑主義とから判断するに、彼らは次のように信じているのであろう。すなわち、専門家たちは、自らの権限の範囲を踏み越えないかぎり、したがって「生活世界の植民地化」に加担してしまわないかぎり、技術的な諸問題を精確かつ適切に解決しうるのだ、と。しかし思うに、彼らは、専門知識（expertise）の自律性をこのように容認することで、湯水とともに赤子を流してしまっているのである。しかも彼らはそうしたことを、テクノロジーが主要な政治的争点となっているまさにその時期に行っているのである。

第二次大戦以降の時代は、テクノロジーの政治が出現したことによって特徴づけられる。この政治は、

より合理的な社会は、利害間の対立を回避しうるのであり、科学的な合議^{コンセンサス}を通じて同意に達しうるのだ、という古い信念を徐々に論破していった。それに代えてわれわれは、あらゆる種類に及ぶ技術的な諸問題に関する民事訴訟や示威的なデモ、政治的な論争、などの急激な増加を目の当たりにしてきた。貨幣、権力そして暴力が、テクノロジーに関する諸問題に意思決定を下す役割を担い続けている。マルクス主義者の学生たちがこの現象に驚かされることはなかった。というのも、これらの利害対立はマルクスが十九世紀に分析した種々の闘争を新たな舞台で単に繰り返しているにすぎなかったからである。

今日のわれわれは、実験装置の前で互いに頷きあうといった科学者たちの古いイメージに類似した技術的な進歩を、もはや期待してはいない。実際、われわれはもはや科学者たちであっても見解の一致をそう簡単に見出しうるなどとは信じてはいない。技術的な進歩についてのわれわれのモデルは、ありふれた政治にますます類似してきたのである。多様な利害関心は、これまで法律制定に影響を及ぼそうとして互いに競合してきたのと同じように、いまやテクノロジーのデザインに対して影響を与えようと相争っているのだ。医療テクノロジー、輸送システム、インターネット、教育のテクノロジー、等々に関するオルタナティブなデザインには、それぞれ主導者たちがいるわけだが、彼らの生活様式や富もまた種々の技術的デザインによるコントロールに依存しているのである。彼ら主導者たちは自身の観点について多少なりとも合理的に議論し、互いに批判しあっている。テクノロジーに関する論争は新聞の第一面に日々登場している。かくしてわれわれは、自らが技術^{テクノカル・ポリテイクス}の政治の新たな時代へとすでに踏み込んでいくことを知るにいたる。

以上が、フランクフルト学派のアプローチを、「合理性に対する合理的批判」であろうと意図したものであるとして、私が再定式化した理由である。近年の構成主義的なテクノロジー・スタディーズは、この批判の目的にとって有益なものであり続けている。私は「構成主義」という用語を、一九八〇年代のイギリスとフランスで擡頭した、テクノロジーの社会的研究に従事する諸学派と、北欧諸国におけるその連帯者たちを、緩やかに指し示すものとして用いている。イギリスの社会構成主義者たちとフランスのアクターネットワークの理論家たちはともに、諸々の社会的要素にもとづいた技術的発展の偶然性を強調している。両者ともに、テクノロジーの自律性という伝統的な見方に挑戦しており、制度や法に対するのと同様の仕方でもテクノロジーを研究している。それらの方法論上の特性がわれわれにとって有意だというのはないが、この一般的なアプローチが有益であることはすでに立証されている。加えて、それはフランクフルト学派の批判に対する支えを提供してくれるものなのである。

フランクフルト学派の思想から引き出される洞察を近年のテクノロジー・スタディーズに結びつけることは可能である。テクノロジー・スタディーズそのものは社会的合理性に対するマルクス的な批判に類似しているからである。テクノロジー・スタディーズに携わっている人々の多くは、マルクスがなした寄与に気づいていないか、あるいはそれを肯定的に評価していない。けれども彼らは、他ならぬマルクスの議論の構造そのものを、多岐にわたる研究の特定の文脈のなかで、知らないうちに再生産しているのである。もちろん、今日ここでわれわれがテクノロジー・スタディーズについて議論している争点は、マルクスの批判がそうであったのとは異なり、工場に関する問題に制限されているわけではない。テクノロジーは社会生活のあらゆる領域に溢れかえっている。医学、教育、スポーツ、そして娯楽は、すべてが高度にテクノロジー化されている。加えて、テクノロジーはその効果を、人間の領域に対してのみならず、自然に対してまで普く行きわたらせてきたのである。これらすべての領域において、マルクスが工場について研究したのと同様に、合理的な生き方をどのように組織するかということに関するさまざまな論争と闘争が繰り返され続けているのである。テクノロジー・スタディーズがこれらの論争と

闘争の意義を認識しているかぎり、その研究は形式的偏向に対する批判をも構成することになるのである。

テクノロジー・スタディーズとマルクスそしてフランクフルト学派を組み合わせたアプローチを、私は「道具化理論」(instrumentalization theory)と呼んでいる。それは批判的に更新された合理化理論であり、テクノロジーのみならず何であれ合理化されたシステムまたは制度に対して適用されるものである。それらすべては、特定の社会的・文化的・制度的な諸条件のもとで、社会的合理性の三原理のうちの一つないしいくつかの原理を実現している。それら特定の諸条件が、事案解決に適用される意思決定の規則を提供しているわけだが、技術的に不十全な仕方規定されたいくつかのデザインのなかからひとつを選択するという課題は、こうした決定規則のもとで、偏向を受けつつ解決されているのである。社会的合理性に対する批判は、したがって、基本的な合理化作用が機能する水準と、デザインを特定する権力関係ないし社会・文化的条件からなる水準という、二つの水準で遂行されねばならない。私はこれら二つの水準をそれぞれ、一次的道具化、二次的道具化、と呼んでいる。それらは、世界とともに作り上げている技術的客体(対象)と主体とが内的に連結された、諸々の側面から成り立っている。

	機能化	実現化
客体化	脱文脈化 還元	体系化 媒介
主体化	自律化 位置決め	天職 イニシアティブ
道具化理論		

客体に対する技術的コントロールの可能性を開く初期段階での洞察は、二つの概念操作を前提している。第一に、客体は脱文脈化され、元来それが根差していた環境から分離されねばならない。第二に、目標という観点から機能化されうる側面だけを際立たせるために、客体は単純化されなければならない。これらの概念操作は、利害関心を離れた主体によって、つまりは自律し、客体から独立しており、それらを利用するために自分の位置を戦略的に定めた主体によって遂行されるのである。

機能的概念化の水準から実際の装置(device)によって形づくられている水準に移行することで、主として現存する技術的・社会的な環境に起因する一群の新たな制約と可能性がもたらされる。脱文脈化された客体は、その可能性を開発される前に、あらかじめ現存している装置とシステムからなる文脈のなかに位置づけられねばならない。客体が被ってきた単純化は、客体がそのうちにあって機能する社会の倫理的で美学的な使用域^{レジスター}から引き出される諸々の新たな媒介によって埋め合わされねばならない。そして、利害関心を離れた主体は、客体に対し天職の意識をもって関わる者として、また客体を操作するに際してイニシアティブを發揮すべく要求されている者として、自らを見出すのである。道具化理論に関する以上の簡略な記述は、私のいくつかの著書でより詳細に記述された議論展開のごく一部を提示するものにすぎない。

一つの事例が、二つの水準のあいだの関係をより明晰なものとするのに役立つであろう。マルクスの

政治経済学批判は、人間を具体的に拘束している支配・従属という関係を、形式的に平等な市場での関係に置き換えることが、何を帰結するのかを示している。この操作は、自然的・社会的に一体化されている諸々の要素を、生産と分配からなる資本主義システムへと脱文脈化し単純化するものである。原材料として扱われる事物は、自然的な場への結びつきを解かれ、生産の文脈において単一の有用な側面を露わにすべく分解され、あるいは処理される。それらの事物は、生産過程を経ることで、人間的な文脈——事物はそこで消費に供される——に適合した諸般の新しい質を獲得することになる。人々も同様に処理される。彼らは家内での仕事という伝統的な文脈から引き剥がされ、工場のなかに再配置されるのである。もちろん、樹木や鉱物と同様に、人々から生産に関わらない側面を剥奪することはできない。けれども彼らは、工場の規則によって、労働の場で生産的な質だけを露わにすべく強いられうることになるのだ。それらの質は、仕事及要求してくるもの——イニシアティブへの要求も含めて——によって形づくられている。かような再配置を受けることで、財と労働は市場を流通し、伝統社会の経済に付着してきた諸々の「非合理的」外被から解放されることになる。だが、資本主義の合理性は、ただ資本家だけが労働日の長さを設定する権限を付与されている、という事実によって偏向をきたしているのである。これは市場社会の偶然的な特徴であり、異なる社会条件のもとでは異なる仕方でデザインされえたものなのだ。したがって、それはテクノロジーの領域における偏向したデザイン原理の等価物なのであり、支配的な社会編成に調和した装置における技術的に不十全な仕方で規定された側面を解決するものなのである。

この合理化の過程には、社会的に合理的な主体としての資本家に関わるもうひとつ別の側面がある。個々の資本家が他の人々と極めて異なっているというのは、もとよりありそうにないことではある。しかし、彼が特定の制約を受けつつ制度的な基盤に立って行為するかぎり、彼の実践は注目すべき特質を帯びることになるのだ。すなわちそれは、最適化がそのなかで追求されるどころの、社会的で自然的な環境に対する無関心、という特質である。かくして、資本主義は伝統的な意味での「人間性」を欠いた主体を構築することになる。この自律した主体は、社会的なコントロールから自らを解放し、利益を獲得するために自らの位置を戦略的に定める。資本主義的实践は、自然に対する効果的で技術的なコントロールをとまなうだけでなく、労働と、そして可能であればどこであれ市場とに対する、効果的かつ技術的なコントロールをも引き起こすのである。

^{ドメスティック}家内的に使用されるテクノロジーのなかでも全く異なる領域から取られた事例が、これまでの叙述を完成させるのに役立つであろう。冷蔵庫のように単純な日常的対象のデザインを考えてみよう。エンジニアたちは、冷蔵庫を作るために、電気回路やモーター、絶縁体、特定の種類のガス等々といった基本部品を用いて、冷気を発生させかつ維持するために、それらを複雑に組み合わせる作業に従事する。これらのテクノロジーはそれぞれ、より脱文脈化され単純化された——あらゆるテクノロジーがそこにもとづいているところの自然から引き出された——要素に達するまで、さらに単純な部品へと解体される。これらの最も単純な要素に社会的性格はほとんど残存していないが、それぞれの要素に含まれている微細な歴史は、ある種のミニマルな社会的偶然性を現しているであろう。この水準では一次的道具化が優勢であり、それは全く純粋に技術的な洞察という形式を取っている。

だが、まさにこの理由によって、つまりこれらの技術的な係争点が徹底的に単純化されており、あらゆる文脈から引き剥がされているために、最も単純な要素についての知識はデザインを完全に規定するには不十分なものなのである。例えば、冷蔵庫のサイズに関する最も重要な問いは、技術的に解決されるものではなく、純粋に社会的な基盤にもとづいて、そのサイズを使用する標準的な家族に見込まれ

るニーズを考慮したうえで解決されるのである。家族のサイズに関する考慮でさえ十分に決定的なものではない。買い物に徒歩で毎日通えるような地域では、買い物に週一回だけ自動車に通えるような地域に比べて、冷蔵庫は小型になる傾向にある。それゆえ、この人工物の技術的デザインは、本質的な事柄に関して、社会の社会的デザイン (the social design of society) に依存していることになる。冷蔵庫は現象の全く異なる二つの使用域を継ぎ目なしに (seamlessly) 結合しているのである。

この事例から見て取れるように、技術的装置を作り上げるすべての段階にわたって、つまり最も単純な要素を取り出す最初の段階から装置の最終形態を仕上げる段階にいたるまで、デザインの決定は、社会的な制約にもとづいていることによって、技術的にますます不十全な仕方で行われることになるのである。こうした二次的道具化の役割は絶えず発展していくものであるが、それは、ある人工物が、発明された最初期の段階から、社会的に流通する装置を通じてそれが開発され、道具的に実行される、という後続の諸段階を経ることで、絶えず発展していくのと同様である。事実、新しい装置が公開されたあとでさえ、それはユーザーのイニシアティブと調整を介したさらなる二次的道具化を依然として被りうるものなのである。その結果、それは自らが組み込まれている世界によって徹頭徹尾規定されている、ということになる。この意味で、それは社会的に構成されているということができる。

二次的道具化は長期間にわたって著しい規則性を示す。その過程を通じて、個々の装置を理解する標準方式と、諸々の装置を類的に把握する標準方式とが現れる。これは構成主義的なテクノロジー・スタディーズにおいて「ブラック・ボックス化」と呼ばれるものである。こうした標準方式の多くは、デザインを形づくるのに成功してきた特定の社会的需要を反映している。これらの社会的な標準形式は、私が「技術的コード」と呼ぶものにあたる。冷蔵庫の事例はこの概念を例証している。冷蔵庫の技術的コードは、立方体の形をした脚部のような特徴を、家族のあり方を定めている社会的原理との相関において規定するのである。ある場合には、技術的コードは政治的特徴を帯びてきた。例えば、産業革命における労働の区画化と機械化がそれである。フーコーによる監獄の研究は、政治的な負荷を帯びた技術的コードの操作に関する別の事例を提供している。

技術的コードは、デザインが必要となる場合や、デザインの調整が求められる際に、ときに明示的に定式化されることがある。けれども、それらは多くの場合、文化や慣習的な規律 (training) のなかで暗黙のままにとどまっているため、社会学的な分析によって抽出されねばならない。いずれの場合であれ、研究者は、デザインを統制する規範としての技術的コードを、理念型を提示する手法によって定式化しなければならない。そのような定式化は、技術的な言説と、^{エキスパート}専門家の実践、そして社会的、文化的ないし政治的な実践とのあいだで生じている翻訳過程の所在を明らかにするのに役立つ。この翻訳過程が、研究のツールにすぎない理念型の定式化とは対照的に、技術的コードの現実性をなすものなのである。翻訳過程はつねに進行中のものであり、困難をとまっているにもかかわらず、大体において効果を発揮している。標準的な冷媒ガスがオゾン層を破壊していることが明らかになったとき、環境主義者たちは皮膚癌に対する人々の公共的な関心を明瞭な言葉によって分節化した。この関心は、すぐさま政府による規制へと翻訳され、次いでエンジニアたちによって実行される技術的な手続きへと翻訳された。こうしてもたらされたデザインは、環境に対して繊細に配慮する新しい技術的コードに応ずるものとなったのである。

この冷蔵庫の事例は無批判なものに見えるかもしれないが、家内的テクノロジーの社会学は、核家族が発明とデザインに与えた影響力という観点から、フェミニスト研究者たちによって探究されてきた。テクノロジー・スタディーズに対する彼(女)らのフェミニスト的なアプローチは、テクノロジーの批

判理論と私が呼ぶであろうものを暗黙のうちに「行おう」としている。あるいはむしろ、テクノロジーの批判理論は、フェミニストのテクノロジー・スタディーズによってなされたある種の作業を、合理性に対する一般的な社会批判という文脈のうちに位置づけることができる、というのがより正確であろう。フェミニストの議論は次の区別に依拠している。すなわち、家内のテクノロジーに関して狭く概念化された技術的特性（例えば、家内のテクノロジーが作業課題を遂行する際の、速度や信頼性といった特性）と、家内のテクノロジーがそのうちに位置づけられている生活世界的な文脈とのあいだの区別である。食器洗い機は食器を洗うのに要していた時間を短縮してくれるが、それは家事労働が依然として主に女性的なものを意味する文脈でのことなのだ。種々の広告に登場する幸せそうに満足した主婦のイメージは、この文化的なステレオタイプを確証している。したがって、食器洗い機は、労働を節約する装置として意味されているだけでなく、より具体的には女性による労働の代替物として意味されているのである。もちろん、他にもさまざまなタイプの食器洗い機があるし、主婦というモデルでさえ別の文脈でのサービスを行いうるわけだが、しかしこの種の見解は単にわれわれを異なる食器洗い機の存在に留意させるにすぎない。装置が文化内部のさまざまな文脈のあいだを移動するという事実は、あらゆる文脈から自立した自己充足的な事物として装置を取り扱う権限をわれわれに与えるものではない。

われわれが慣習的に「技術的な」ものと考えている事柄は、生活世界的な文脈から抽象されたものであり、これによってわれわれはテクノロジーと社会を誤って表象することになるのである。冷蔵庫と食器洗い機に関して真であることは、ちょうどマルクスが『資本論』で分析した機械に関して真であることと同様である。彼は工場を生産活動の場であると理解していただけでなく、労働者たちの生活環境として、また労働者に対して破壊的に作用する環境としても見ていた。すべての合理的システムはこうした二重の側面をもっている。それは、一方では、社会的合理性の三原理のうちのひとつまたはいくつかにもとづいてなされる諸々の操作からなる構造体であり、他方では、合理的システムないし組織のなかに登録された人々によって経験される複雑な生活世界なのである。二次的道具化はこの生活世界のなかで起こり、次いで、デザインに対する初期段階の社会的闘争を反映させつつ装置を特殊化する作業として、あるいは装置とともに現存するユーザーたちの表現として、技術的な過程へと移行するのである。

テクノロジーが社会環境のなかに介入してくる度合が増すにつれて、生活世界の側からの抵抗によってさらなる二次的道具化が引き起こされる。私は、より初期の著作のなかで、コンピュータネットワークにおけるヒューマンコミュニケーション、そして実験医療という、二つの領域に焦点を当てたことがある。それぞれの事例において、テクノクラシー的または科学的なエートスが、新しい生活環境の構築に携わるその作業を統括していた。フランスでミニテルと呼ばれていたネットワークは、インターネットと同様に、情報交換機能を強化するという意図のもとに導入されたものだが、双方のネットワークはともに、コミュニケーションシステムを提供する設備へとユーザーによって最終的に追いやられ修正を受けることになった。同様に、エイズ患者たちは、彼らが関与していた初期のネットワークのデザインを、非人間的な仕方^フで限定されたものとして受け取った。当時普及していた実験計画のもとでは一貫した協力体制が得られなかった^コので、患者たちはやがて実験的デザインの変化を要求し、最終的にそれを実現させるにいたった。それぞれの事例において、技術的環境のなかに身を置かざるをえなかった者たちは、その環境に対する非常に異なった自己理解をもたらし、またデザインした者たちの期待とは非常に異なったニーズを作り出したのである。ユーザーと技術的システムとが対峙することによって、当初思い描かれたものよりも広い範囲に及ぶ人間的なニーズに役立つような、際立って特徴的なある混成体^{ハイブリッド}が出現したわけである。私はこのような変化を、民主的で進歩的な性格をもつものだと考えている。そ

これらの性格は、あらゆる種類の闘争と進歩にとって——テクノロジーに直接関与しない人々にとっても——不可避的なものとなっているこのテクノロジー化された社会世界の開放性を維持するために、欠くことのできない本質的なものなのである。

しかしながら、技術に関与する公衆にとって、民主的プロジェクトにもとづいて介入することは、国家権力や自治体の権力が増大するにつれて、次第に困難なものとなる。こうした条件をうけて、ひとはテクノロジーというものを多かれ少なかれディストピア的なシステムの直接的表現だと見てしまいがちなのだが、しかしこれはあまりにも誇張された見方である。ごくわずかの真理すら認められないこの見方は、しかし広範にわたって影響を行使しているテクノロジーへの態度を説明するものなのであり、またハイデガーやエリュールのような思想家や彼らのポストモダン的な追従者たちに持続する関心が奈辺にあるのかを説明するものなのである。

私はそのような見方に対して、理論的・実践的な双方の理由のゆえに懐疑的である。彼らのアプローチにおいて、二次的道具化の水準は外在化されている。ハイデガーの用語法によるなら、二次的道具化は単に存在的な過程であろうし、一次的道具化において露わにされる (revealed) 存在論的基礎に従属するものだという事になる。道具化理論は、技術的なものと社会的なものを、多かれ少なかれ基礎的な階層秩序のなかに位置づけてしまうのではなく、むしろそれぞれが全体性の一契機として把握されるような弁証法的な概念化を提案する。それは、ディストピアの論理によっては閉ざされてしまう政治的行為を通じた、根本的な変容の可能性を開くものなのである。

そのようなテクノロジーの弁証法的理論を欠いていたために、初期のフランクフルト学派は一般に流布している自体説的な批判を借用していた。それは、一次的道具化を過度に誇張するものであるために、あたかもテクノロジーそのものが批判の対象であるかのように考えられてしまった。初期のフランクフルト学派は、非常にしばしば、左翼版に改造された——しかし当人よりも品行方正な——ハイデガーの役割を果たしてきたのである。けれども、アドルノによるいくつかの論評と、マルクーゼの著作で展開されたより長大な分析は、それとは異なる事情を物語っている。フランクフルト学派は、つねに次のように考えていた。すなわち、テクノロジーは、異なる社会的条件のもとに置かれることで、人間性を支配するよりはむしろ、人間性に仕えるために、再びデザインし直されることができるのだ、と。この楽天的な見方は、テクノロジーのデザインをめぐる社会的闘争に関する理論を必要とする。それはフランクフルト学派が決して発展させなかった理論である。テクノロジーの批判理論はこの空隙を満たすものである。

結論として、テクノロジーの批判理論に関する以上の予備的な考察を、次の七つの命題によって要約することにしたい。

一) この理論は、テクノロジーの領域における社会的合理性に対する批判であり、市場の合理性に対するマルクスの批判に平行するものである。

二) この理論は、テクノロジーにおける形式的偏向の分析にもとづいている。

三) この偏向は、分析的に区別されうる一次的／二次的道具化を継ぎ目なしに組み合わせたデザインのうちに跡づけられる。

四) 技術的な構成要素は、一次的道具化の水準で、最小限の二次的な制約をともないつつ発見される。

五) これらの要素は、形式的に偏向した諸々のシステムや装置のなかに組み込まれている。それらのシステムや装置には、二次的道具化の水準で記述されるような、より広範囲にわたる技術的・社会的制約が具体化されている。

六) 二次的道具化の水準で技術的にコード化された特定の形状は、技術的デザインにおいて不十全に規定された側面を解決するものである。

七) テクノロジーのデザインと生活世界的な文脈のあいだの緊張関係は、諸々の新たな需要を引き起こす。その需要はやがて、修正を施された技術的コードによって規定された、新しいデザインへと翻訳されることになる。